

日本人留学生の帰国後のケアを目的とした 自助グループ活動セッションの記録 (2)

——逆カルチャーショックへの対応を中心に

高濱 愛
田中共子

1. はじめに

2012年2月に、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）は、過去15年以内に留学を経験した1506名を対象に第2回目となる「海外留学経験者追跡調査」を実施した（独立行政法人日本学生支援機構，2012）。この最新の実態調査によると、「現在留学の同窓会あるいはそれに準じたグループに属していますか」という問いに対して、70.5%が「参加していない」と回答している。一方所属しているものについては、留学先校の同窓会ネットワーク（SNS、メーリングリスト等）が13.4%、「留学先校の同窓会」が10.0%の順に多いが、「日本の学校等による留学の同窓会」に属していると答えたものはわずか2.9%にとどまった。また続く質問で、「留学後のフォローアップとして、ほしい情報・サービスはどんなことですか（3つまで）」と尋ねると、最も多かったのが「留学経験者に特化した就職情報（31.9%）」であったが、「留学経験者・同窓生が集まれる実際の場所・機会」が次いで多く、24.1%を占めていた。これらの結果から読み取れるのは、留学経験者たちが、帰国後に留学経験者同士で集まりたいと望んでいながらも、現実にはそのような場所を必ずしも見いだせてはいないことである。同調査は、「留学前後の適切な指導が行われることが望まれ

る」と結論付けているが、日本の大学においては、留学前の指導に比して、留学後（帰国後）の指導については開拓途上にあるとあってよいだろう。

そこで大学で海外業務にあたる筆者らは、留学を終えて帰国した学生が望んでいる、留学経験者同士で集える場を創造する試みに着手した。本稿は、自助グループ活動の手法を応用して、筆者らが開発した留学経験者対象のセッションの詳細を報告したものの続報である。留学生のなかでも交換留学制度等による留学生は、帰国後に日本の所属大学に戻るようになるため、その指導を大学が提供していくことは、彼らのニーズに合致するところが特に大きいと考えられる。先に高濱・田中（2012a）では、セッションを巡って、①事前アセスメント、②直後の評価、③8か月後の評価を中心にした報告を行った。つづいて、高濱・田中（2012b）では、セッション前半で逆カルチャーショックをテーマとして使用されたテキストおよびワークシートの詳細や、参加者の具体的な語りの内容を示した。本稿では、これらに続いて、セッション中盤で扱った逆カルチャーショックの対応に関する部分を中心に、具体的な語りの記録について報告していく。

2. 方法

研究方法の詳細は、既に高濱・田中（2012a）で報告済みであるため、本稿では以下に要点のみを抜粋しつつ、セッションの概略を記載する。

参加者 日本の X 大学の留学経験のある日本人学部生 7 名（表 1）。

設定 2009 年某月に、X 大学において約 4 時間にわたり、A から G を集めて「留学経験者のつどい」と称したセッションを実施した。留学経験のある本稿著者 2 名が講師となり、高松（2004）にならって自助グループのセッションの運営にあたった。その他、参加者の一部と同じ大学に留学経験を有する日本人女子学生 1 名がアシスタントを務め、つどいの全体の様子を、参加者の許可を得たうえでビデオカメラ 2 台によって録画した。

表1 参加者の属性

記号	性別	年齢	留学先地域	留学種別	留学期間	帰国後経過期間
A	女	21	北米	語学研修	4か月	1か月
B	女	21	北米	語学研修	4か月	3か月
C	女	21	北米	語学研修	4か月	1か月
D	女	22	欧州	交換留学	9か月	6か月
E	女	22	欧州	交換留学	9か月	5か月
F	男	22	欧州	交換留学	9か月	4か月
G	男	23	欧州	交換留学	11か月	4か月

注1) Gは、欧州留学の約1年前に北米で5か月間語学研修の経験有り。

注2) 本表は、高濱・田中(2012a, p.94)からの再掲である。

学習内容 当日は、Paigeら(2002)、八代ら(1998)、「Study Abroad Re-entry Handbook」を参考に作成した、バインダー式のテキストを使用した。まずワークシート(表2)にしたがって自らの逆カルチャーショック対応法を参加者に書いてもらい、次に内容に関する語り合いを行った。最後に、表3のヒントを参照しながら逆カルチャーショックに対応するためのアイデアを出し合った。

表2 ワークシートの逆カルチャーショック関連部分の記載

<p>① あなたは、自分の逆カルチャーショックにどのように対応しましたか？ 下の空欄に書いてみましょう。 (例) 留学生と話す、留学仲間とメールする、我慢する、忙しくして紛らわす、大学の相談室にカウンセリングに行く</p> <p>② グループのメンバーと逆カルチャーショックの対応法について、体験したことを語り合おう。</p> <p>③ 逆カルチャーショックに対応するための行動計画(アクション・プラン)を立てましょう。</p>
--

表3 テキストの逆カルチャーショック関連部分の記載

<p>逆カルチャーショック対策の行動計画作りのヒント ☆自分自身でできること</p>
--

→自分自身の考え方を調整していくことはできるでしょうか？

☆周りの人にはたらきかけてできること

→周りの人に相談することはできるでしょうか？

【参考：リエントリーへの行動計画に関する具体例】

1. 大学の国際交流を扱うセンターを訪れて後輩に留学先での経験を教えてください。みなさんの留学経験は、留学希望の後輩にとっては貴重な財産・情報です。留学先での写真等を持参してください。また、大学では海外留学に関するフェアやイベントを定期的で開催していますので、留学の「先輩」として、後輩に留学について伝えていきましょう。
2. 留学生を支援する大学のボランティア活動に参加しましょう。あなたが交換留学生なら、あなたの留学先から日本に来ている学生さんと、立場を逆にして友達になるという興味深い経験ができるでしょう。ボランティア活動経験は、留学経験と合わせて、就職活動時の自己PRにも役立てることができます。
3. 学内や学外にある国際関係・海外交流関係のサークル・クラブ・ボランティア活動などに参加してみましょう。あなたの広い視野、海外への興味、留学で培った国際性などを、いかしていく道を探してください。
4. 留学整理帳を作って、自分の体験を振り返ってみましょう。写真や資料を整理したスクラップブックに、考えたことや発見したことを書き、自分の軌跡を眺めてみましょう。あなたはどう変わり、何を得ましたか？
5. もう一度海外に行くとしたら、どのような方法が考えられますか。自分にとって、やってみたい方法や、関心のある方法があったら、実現可能性を探ってみましょう。たとえば再留学とか、思い出の地を訪れる観光旅行などはどうでしょうか。

(Study Abroad Re-entry Handbook より一部改変)

3. 結果

高濱・田中（2012b）と同様に、学習の流れに沿って、逆カルチャレーションの対応に関する学生の対話記録をセッション当日の発話順に記す。参加者のプライバシーにかかわると思われる個人名や地名などには、各留学先の国名を「○○」、所属大学を「X 大学」とするなど、適宜伏せ字を使用した。A から G は参加者、T1 は本稿の第一著者、T2 は第二著者を表す。また、学生の対話記録は特に重要と思われる部分の抜粋であり、注

目すべき部分に適宜下線を施した。表中の括弧内の部分は、筆者が読みやすさのために記した補足部分である。明らかな言い間違いと思われる部分は、適宜修正した。対話のうち例えば、「次、Aさん、お願いします」など、T1による指名を示す部分は省略した。

はじめに逆カルチャーショックの対応法（表2①）について、Gは、留学仲間とのハウスシェアや、パーティの開催が逆カルチャー「ショックを軽減している」と述べている（表4）。自主的に「毎週集まって、留学生が日本語を勉強して、日本人が外国語を勉強する場」となるサークルを立ち上げ、留学という共通項のある人々を周囲に配置してアクセスしやすくするという方法をとっている。

表4 逆カルチャーショックへの対応に関するGの語り

G：僕が逆カルチャーショックに対応したことは、先ほど話したようにハウスシェアをしたり、文化を自分のまわりに作り出すことで対応して、そういうハウスシェアやパーティをすることで馴染むようにしています。あと、パーティっていうのも一回だけじゃなくて、毎月開くようにしているので、目標があるのでそれに向かって頑張れることですね。さっき言ったように日本に対してあえて適応することをあきらめるってことですね。（中略）あとは今度夏から大学院にいこうと思ってるんですけど、そういう計画を立ててほんとに自分がそっちにも心が入るので日本にいてもそのことを考えたり、勉強することで、逃げといえば逃げなんですけど、そういう計画を立てたり努力することで、自分のショックを軽減していると思います。（中略）（ハウスシェアづくりのきっかけは）〇〇（国名）から帰ってきて寮に戻ったんですけど、それは嫌だと思ったんで、ハウスシェアにしようとか考えてたんですよ。一緒に留学してた人に声かけて一緒にハウスシェアしようとか。そんな感じで計画してましたね。（中略）サークルは〇〇（国名）から帰ってきてから立ち上げたんですけど、僕が〇〇（国名）に行ってる間に別の人にやってもらって、帰ってきたもんで一緒にやっています。（中略）僕のサークルは毎週集まって、留学生が日本語を勉強して、日本人が外国語を勉強する場として、興味ある人を集めてやってるんですけど。ほほ会うのは毎日なんですね。それプラス、フィールドトリップで伊豆とか行ったり、パーティとかいろいろやってますね。

T2：留学経験者と留学生が多い？

G：そうですね。それとあと留学に興味があってこれから行く人が多いです

ね。(中略) X大(所属大学)にそういう場所が用意されてたのと、周りに留学経験者がいたっていうのがいいことかなって思いますね。あと僕今最終学年で授業にいくってこともほとんどないんですね。それもまた助かるなって思います。

T2: もっと下級生だったらみんなと一緒に授業行かなきゃなんないことが多いよね。

G: はい。周りはいつは変だってみてたので、逆にみられて自分は変だって当たり前と思えば、それは当たり前なんで、別に変えなくていいなって思うんですよ。

Aは、帰国して間もないころ気分を紛らわすために、母親や留学仲間等友人と話をしていたが、それでも物足りなさを覚えるときは、留学中の写真を見て思い出に浸るという行動をとっている(表5)。一人で悩んでいるとネガティブ思考に陥りがちだが、とりわけ仲間と話すことが、孤独感を和らげ、安堵感をもたらすという認識を述べている。

表5 逆カルチャーショックへの対応に関するAの語り

A: 私は、帰ってからはじめのほうは、一緒に話をしたいって気持ちのほうが大きかったので実家のお母さんのところに電話をかけて何気ない会話をしたりだとか、その留学の仲間とまめに集まって話をしたりとか、バイトじゃなくて、自分自身をちょっと忙しくして、教育実習が留学の前にあっただのでその期間の間なかなか会えなかった友達とかと会って話をしたりだとか、気分をまぎらわすことが多くなりました。その他にも、今まで留学行っている間のレポートや宿題に取り組んだりとか、△△(外国語名)検定の勉強とか、skypeを通じて留学先の友だちと話をしたりとか。

T1: それは〇〇(国名)の友だちってこと?

A: はい。あと、それでも寂しかったりとか時間をもてあましちゃったりするときは、留学中の写真とかを見て、思い出に浸ってることがあります。

T1: はい。どの方法が一番効果的だったというか、気に入ってますか?

A: やっぱ留学の仲間と集まって話をすると、情報を交換できるんで。

(中略)

T2: 同じことを悩んでいる共感とか安心感とかはある?

A: はい、自分だけじゃないんだっていう、一人一人の部屋にいると自分だけが悩んでいるのかなとかすぐマイナスに考え始めちゃうんですけど、集

まっけて話をすると、自分の問題じゃなくて、これはみんな留学に行ってきた帰ってきて誰にも起こっちゃうことなんだなって、プラスに受け止めるようになったと思います。

Cは、表6のように、自分の抱える問題を「ほんとに理解してくれ」ると考えている留学経験者に、自分の思いを話すという行動に出ている。留学という自身の目標を達成した後、新たな目標を見いだせていないことに悩んでいたが、多様な行動をとりつつ進路を柔軟に検討中だという。

表6 逆カルチャーショックへの対応に関するCの語り

C: 嫌なことがあったりとかすると思うんですけど、私はそれを我慢できないほうなので、何かあったら誰か話せる人に話したりとかしていました。留学行っていた人はほんとに理解してくれて、〇〇(国名)に行っている間にカラオケに行けなかったんで、帰ってきてからストレス解消法でカラオケに行きました。あと、留学行く前は留学が一つの目標で、お金を貯めたり自分の勉強をしたりして頑張ったんですよ、でも終わっちゃって今何しようってなったりとか、次の目標とか夢を持つことができなくて、やっぱり就職にするか教採にするか迷ってるんですけど、悩んでもわかんないから、模試受けてみたりとか、××学部(Cの所属学部)だけで就職活動とかもやってから受けてもいいんじゃないかなって思って、両方やろうかなって思ってます。(中略)それも留学行って、いろいろやって決めてもいいんじゃないかなって思いました。

Bは、「一緒に留学行った子には何でも話せる」と考え、留学仲間との語り合いを活用していた(表7)。またソーシャルネットワークサービス(SNS)で海外の友人と交流して、励みにしていた。

表7 逆カルチャーショックへの対応に関するBの語り

B: 私は△△語(外国語名)を忘れたくないっていうのがあったんで、せっかく覚えた△△語(外国語名)とかを忘れると留学の意味がなくなっちゃうって、ちょっと怖かったんで、海外ドラマを見まくったり、音楽とかを聴いたり、洋楽ばかり聴いたりして、常に生活の周りに△△語(外国語名)を入れていたくて。あとは、facebookっていうやつで友だちと交流

とかしたり、△△語（外国語名）を使うとかしていますね。あとは一緒に留学行った子には何でも話せるので、相談とかしたり、忙しくしたりもあるし、あとは旅行にでかけたりとかはありますね。（中略）（facebookで話してたのは）最近の人もあるし、違う国の人と一緒に留学行って帰国した人とか。近況を聞いたりとか。みんなそういう近況報告をし合っていると、それぞれの道でみんな頑張っているんだなって思うと、頑張れるので。

T2：誰かに相談しにいってというのは、教えてくれる人がいるわけじゃなくて語り合って感じ？

B：語り合いですね。なんかあたしこういう風感じてるんだけどどう思うみたいなそういう感じです。

（中略）

T2：（そういう語り合いをすると）ちょっと気が晴れたりする感じ？

B：そうなんですよ。

Dは帰国時期が大学の休暇中にあったため、アルバイトで多忙にしていたが、新学期に入ってから留学仲間との会話を逆カルチャーショック対策に役立てている（表8）。

表8 逆カルチャーショックへの対応に関するDの語り

D：私は夏に帰ってきたので、朝から夜までバイトしたりそういう生活をしていました。X大（所属大学）に帰ってきてからは、一緒に（留学から）帰ってきた子もいたのでよく話をしたりしましたね。

表9の通りFもBと同様、SNS等で留学先の友人と交流している。また語学の勉強には、一人で取り組むだけでなく、留学生との出会いもいかしている。

表9 逆カルチャーショックへの対応に関するFの語り

F：やっぱりfacebookとかskypeとかで、留学先で知り合った人と交流したのが、対応ではないけど、逆カルチャーショックの緩和みたいなことには貢献したと思います。あとは、すごく難しいんですけど、〇〇（国名）語の勉強を続けるということは、教材を向こうから持ってきて、夏休みはずっと一人だったんでひたすら勉強していたんですけど、××（大学所在

地) 来たら偶然〇〇(国名)から留学生がいたんで。

Eは、留学先の友人をホームステイという形で1か月受け入れ、留学先の言葉をつかえたことがショックの緩衝剤となったと語っている(表10)。また目標達成のため、帰国後はさらに意欲的に大学の講義に臨むようになったという。

表10 逆カルチャーショックへの対応に関するEの語り

E: さっきも言っていたんですけど、Dさんと話したりしてたんですけど。帰ってきてすぐに環境に戸惑いを感じていたんですけど、一番向こうで仲良くしていた〇〇(国名)人の子が私の家にホームステイに来ていたので、それで日本語と〇〇(国名)語が両方使える期間が1か月あったというのが、逆カルチャーショックの緩和になったのではないかと思います。(中略)1か月(日本に)行きたいって言って、誰か泊めてくれる家を捜して、じゃあ来なよみたいな感じで(中略)。京都に行ったり、泊まりもホテルに泊まったりしたり。ほとんど1か月一緒にいましたね。(中略)あと、〇〇(国名)を忘れたくないのと会いに行きたいというのがずっと夢にあるので、授業に留学前よりしっかり打ち込むようになりました。その打ち込み方も授業でいっぱい発言していかないといけない授業だったので、やるべきことに対する取り組み方が変わってきて、今でも先生に普通に言えるようになったのがこれは変化なんじゃないかな～と思います。

総じて、留学経験者や留学先でできた仲間との、対面またはSNS経由での語り合いが一番の逆カルチャーショック対処法であるという趣旨の語りが、共通していた。

続いて、アクションプラン(表2③)については、留学中の日記・写真を振り返ったり、留学体験談を披露したり、ボランティア活動をしたり、資格試験等夢や目標に向けた学習をしたりすることが、各参加者から語られた(表11)。

表 11 アクションプランに関する参加者全員の語り

- D: 私, 留学中ずっと日記を書いていまして。(中略) こういうことがあったとかいろいろ。(中略) (その日記を読むと) 自分バカだったなみたいな時もあるし, 気付きますね, 自分がどういう生活をしていて。(中略) もともと, 何かあったら書く習慣があったのでそれでストレス解消にもなったし, これからこれをやんなきゃいけないとか書けば分かるから。
- G: 僕は帰ってきてから, 写真が好きなんですよ, 写真を現像してアルバムに入れる作業がすごい好きで。(中略) 思い出しながら写真を入れて写真の説明書きを書いたりだとか, 写真を楽しそうに見せてこれはこうでね〜って言うと, その人が共感してくれるじゃないですか? 伝えていくところで, 仲間を増やすってことじゃないですけど, そのことで共感してくれる人とか自分のことに興味を持ってくれる人とか, 行ってみたいって思う人とかどんどん増やしていくことで, 痛みを分けている感じだと思うんですけど, 例えばこういう機会とかもあるし, ○○(国名)のしたことか発表するときにそういうときに自分が役に立ってるな〜と思いますね。(中略) (所属大学内の留学フェアなどに参加することについて) ○○(国名)のことは知らない人が多いので伝えることが増えるんですよ。(中略) (自分の話に興味を持ってくれる) そういう人たちと話したりとか○○(国名)に興味のある先生に話したりとか, その先生にたまたま機会を与えてもらって○○(国名)のことを話すとか僕は恵まれているなって思いますね, X大学(所属大学)に帰ってきてよかったなって思いますね。
- F: 僕はいろいろ考えているんですけど, やっぱり留学した国と日本とのかわりをずっと持ち続けたいなっていうのはあって, なので今語学の勉強を続けるっていうことと, 出版物が日本語でかかれたものが辞書で2万(円)ぐらいしてとても買えないので, そういう出版物までも人生で一回はたどり着けたらいいなっていうのと, そういう向上心も持っているんですけど。(中略) 自分の仕事とは別でやりたいみたいのは考えています, あとは現地でも知り合った日本語を勉強している人と話したら, 日本人をここに連れてきたいって人がいて, そういう夢が考えられるから, 継続的につながりを持っていけるなって, いろんな空想をしながら逆カルチャーショックを克服しようと思っています。(中略). 一緒にできる人って見つからないので, いればすごくプラスになると思うんですけど, まだ見つからないので。
- C: 帰ってきて語学の勉強を続けたいっていうのがあって, X大(所属大学)にも何個か会話サークルみたいのがあって, それに参加できたらいいなっていうのと, 交換留学で私が行っていた△△(プログラム名)からきている人も2人いるので連絡取り合いたいっていうのがあって, ものすごくよくしてくれてこんなにしてくれるのかなってぐらいいろんなところ

に連れて行ってきて、毎回声をかけてくれたので、それがすごく嬉しくて、そういうことも私もできたらいいなって気持ちがあったので、ボランティア活動とかに興味もすごく持って、今まで私はテニスサークルしかやっていなかったのもっと語学を使って留学経験を行かせるものが見つかったらいいなって、△△語（外国語名）に限ったことじゃなくて私実家が××（地名）なんです。ブラジルから来ている子多くて、ポルトガル語の学校もあるんですけど、現地のパブリックに入れられて泣いている子とか見てきたので手助けできることがもしあればやりたいなって思っています。（中略）留学生も含めてとにかく誰かを助けてあげたいな～っていうのはあって、行った国を好きになってもらいたいし。

A：私は、せっかく4か月で行かせてもらって親にも感謝しているし、何か残るのができたらいいなって一つ目標を持つって思って、今は1月にある△△語（外国語名）検定を一つ、今まで留学してせっかく△△語（外国語名）の話せる力がついたので、少し自信が持てるものがあるのでそれを継続して行って、形として資格が残ったらいいなって、ほんとに少しずつなんですけど、△△語（外国語名）のボランティアとか行ったり、自分が忘れないように継続的に目標をもって。

B：同じことなんですけど、勉強を続けて「自分は海外に行きました」というのを残せるといいので、××（語学試験名）とか△△語（外国語名）検定とか受けてもいいし、人との交流を忘れないで連絡とりあったりだとかここに来ている留学生の人と話したりとか、ありますね。（中略）（現在の留学生との交流状況については）偶然会うこととかあるので、その時はお話をしたり、ゼミの関係もあって海外から来る人が今度いるので、プレゼンしたりとか（することがあります）。

E：今就職活動を始めているんですけど、会社選びの自分のポイントの中に「世界に手を広げていて、かつ○○（国名）に事業所とかがある」というところに自分が着目しているところがあるので、やっぱりどこかでつながってほしいという気持ちが強いので、○○（国名）語も勉強しつつ、就職活動ももしその企業に入れたら入って、仕事がしたいなっていう希望があります。あと、○○（国名）は好きなんですけど、向こうで知り合った韓国人とか中国人とか、特に中国人の人には仲良くしてもらって、中国語にもすごく興味をもっているんで、就職活動が終わったら、勉強して中国にも行ってみたいなっていうのはあります。他の国に興味を持ち始めたのはあります。

なお、このアクションプランの語り合いの後で、Gが自主的に発言したことに対して、Cが興味を持ち、新たな活動の情報が直接交換されるという場面があった（表12）。

表 12 参加者同士の情報交換が行われた部分の語り

G: ちょっと宣伝なんですけど、是非 X 大学 (所属大学) にも外国の子供たちを支援するサークルがあるので、それも是非参加してみてください。
C: はい、教えてください。
G: 子供がいっぱいいて、逆に学生が少ないので。
C: ホントですか? じゃあ行きます行きます。
G: 支援待ちの取り合いなので、もちろん×× (地名) のほうにもあるので是非そっちにも。
T2: 学内の情報っていきわたってないの?
一同: ないですね。
G: 学部によって情報の量が違うと思いますし、サークルってやっぱり口コミなんですよ。
C: サークルっていろいろあるんですよ。私のテニスサークルは△△ (学部の学生) が多いとか。きっかけはやっぱり自分の学部の子が多かったり、国際 (に関するサークル) とかは全然知らなかったですね。
T2: 知ってたらもっと早く行ってた?
C: 全然行ってました。全然違う学部の子と話す機会もないので。
T1: G 君とは同じ学部だよな?
G・C: 学部ですけど…
G: 会ったのはたぶん最近ですね。

4. 考察

上記に示した、逆カルチャーショックへの対応に関する語り合いの記録から、当日の展開を振り返る。まず参加者の語りでは、様々な対応策を講じていることが語られた。とりわけ留学という共通点のある仲間との触れ合いが、対策として最も効果的にとらえていた。これは、セッションの事前アセスメント (高濱・田中, 2011) の中で、対話や人的交流等の活動や目的意識を持つことを、逆カルチャーショック対応策として挙げたことの妥当性を裏書きする。本セッションの前半部分 (高濱・田中, 2012b) で、逆カルチャーショックについては、戸惑い、葛藤、焦り、フラストレーション、隔絶感、退屈が挙げられていたが、そのような状態の中で「何でも

話せる（表7のB）」「ほんとに理解してくれ（表6のC）」る留学仲間の存在が、参加者の精神的な支えになっていたことが読み取れる。

また、セッションの中盤で、参加者同士の自発的対話が、表12のように始まっていることも興味深い。参加者が直接情報を交換しているが、これはCがその前の部分（表11）で、ボランティア活動に取り組みたいと述べたことに触発されて、Gが応答したものである。セッション直後の評価（高濱・田中，2012a）で、Cは「留学を活かしたいという気持ちが強くなった。ボランティアにも参加したい」と記している。本セッションにより留学の活用意欲が高まり、行動化につながる兆しがみられる。

最後に、本稿ではセッションの中盤の記録を扱ったが、これに続くセッション後半の記録については別報に譲ることとする。セッションの前半（高濱・田中，2012b）と中盤では、逆カルチャーショックとその対処法がテーマであったが、これを踏まえてキャリア形成・キャリアデザインについて語り合った部分が、セッションの終盤をしめくくる。逆カルチャーショックを見つめ直しながら、留学の意義を振り返り今後のキャリアへと発展させていくことは、留学経験者本人にとって少なからぬ意義があり、それは学生を海外へ送り出す大学側にも重要な教育的働きかけになる。本研究のような試みが、海外留学経験者の帰国後のサポートの改善・向上に貢献していくことが望まれる。

参考文献

Cadenhead-Hames, R. "Study Abroad Re-entry Handbook"

〈<http://wings.buffalo.edu/studyabroad/Handbook.pdf>〉(2009年11月1日閲覧)

独立行政法人日本学生支援機構留学生事業部留学生事業計画課企画調査室「平成23年度 海外留学経験者追跡調査報告書～海外留学に関するアンケート～」

〈http://www.jasso.go.jp/study_a/enquete2012.html〉(2012年8月16日閲覧)

Paige, R. M., Cohen, A. D., Kappler, B., Chi, J. C., & Lassegard, J. P. (2002). *Maximizing Study Abroad*. Minneapolis: University of Minnesota.

高濱愛・田中共子 (2011)「短期交換留学生のリエントリー・ステージにおける

- 課題の分析——逆カルチャーショックと留学活用を中心に——」『人文・自然研究』5号, pp.140-157.
- 高濱愛・田中共子 (2012a) 「日本人留学生の帰国後のケアを目的とした自助グループ活動——リエントリー課題への対応とキャリア形成の支援を焦点に——」『異文化間教育』35号, pp.93-103.
- 高濱愛・田中共子 (2012b) 「日本人留学生の帰国後のケアを目的とした自助グループ活動セッションの記録 (1) ——逆カルチャーショックの諸相を中心に——」『一橋大学国際教育センター紀要』3号, pp.83-91.
- 高松里 (2004) 『セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド』金剛出版
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子 (1998) 『異文化トレーニング』三修社

付記

本研究は、科学研究費補助金萌芽研究 No. 21653090 (代表・高濱愛) の助成を受けた。